語学教育研究論叢第21号

評話本《岳飛》の動詞接尾辞“个”

原瀬　隆司

On the verb suffix “Ge (个)” in Yue Fei

HARASE Takashi

[内容提要]

评话本《岳飞》里有“ 格个两张信纸”的表现。“格”字后面的“个”可以认为是性质近于一个指示代词的词尾。

在宋代禅家语录当中也有这种表现形式。

本稿探讨动词后面的词尾“个”字以及现代汉语中“是……的”的强调说法，进而考证“的”字的来源。

0　はじめに

1　指示代詞＋“个”＋数詞＋量詞＋名詞

2　接尾辞“个”

3　《岳飛》中の 動詞＋“个”＋賓語

4　動詞接尾辞“个”と“是……的”文

5　まとめ

○はじめに

現代蘇州語には、“格个一滴血”、“格个两张信纸”という表現がみられる。“个”を付けた時、それぞれ“一滴血”“两张信纸”を強調した表現で、“格滴血”“格两张信纸”とは異なるのである。

こうした、指示代詞（“格”）＋“个”＋数詞＋量詞＋名詞の形式をとる表現は、禅家語録にもみられ、実はこの“个”が量詞ではなく、指示代詞の接尾辞として機能していると考えられる。

小稿では、こうした接尾辞の“个”について考察し、それが動詞に付く時の文型を考えてみたい。

この稿を書くに当り、用例として引用した資料は以下のものである。

評話本《岳飛》（全二冊）曹漢昌口述、浦伯良ほか整理 1986 江蘇文芸出版

尚、用例のうしろの括弧中の数字は頁数を表わし、“上”は上巻、“下”は下巻を指す。

1　指示代詞＋“个”＋数詞＋量詞＋名詞

評話本《岳飛》は、蘇州の大衆芸能である評話の口演記録であり、現代蘇州口語を写し取っている。その中には、上に掲げた強調表現が多々みられる。用例：

①照理说，格个一滴血要往下淌，不过只有一个针眼，因为呒不第二滴血跟出来，所以格滴血一出来就凝结。（上 190）

（道理からすれば、初めのその血一滴が下に流れるはずだが、針孔が一つだけなので、次の一滴が出てこない。だからその血は出ると、すぐに固まってしまう。）

②俚想到仔武场里去，呒不酒吃哉，格末该个三杯酒也好杀杀馋。（上 49）

（武科場に行けば、酒は飲めなくなる、（今飲み干した）この酒三杯でとりあえずは飲みたくなる気持ちもおさえられよう。）

③看完格个两张信纸，岳飞交关勿快活，要想拿张倩赶出去。再想，慢！娘在牵记格班弟兄，让我拿格封信拨娘看看。（上 185）

（二人からのその手紙二枚を読みおわるや、岳飛は非常に不機嫌になり、張倩を出ていかせようと思った。が、待て。母がこの二人の義兄弟のことをずっと心にかけているのだから、それを読ませてあげようと思い直した。）

④实在金兀朮啊，今朝老虎阵上格个三个人顶狠，倷齐巧碰在格三个人手里。（上623）

（まったくだ、金兀朮よ、老虎陣での戦のあの三人は実に手ごわい相手だぞ、おまえは今日たまたまその三人に当ってしまったのだ。）

上に掲げた“格个”、“该个”をもつ形式は、同じく用例中にある“格(一)滴血”“格(一)封信”“格三个人”の形式とは異なる。こうした形式は現代蘇州語においては、強調の時に、使われる。これはまた、清末の呉語小説である《海上花列伝》[注1)]にもみられる。例：

⑤我死仔倒是俚先要吃苦，我故歇别样事体才勿想，就是该个一桩事体要求耐。(20回62p)

（私が死んでしまったら、あなたが先ず辛い思いをするわ。今はほかのことは何も思い残すことはないけど、ただただこのことだけは是非ともしてほしいの。）

現代漢語では、数量構造のまえに指示代詞を置く時、指示代詞のうしろに“个”は置かない。それは、この“个”が量詞と考えられているからである。しかし、上に挙げたような 指示代詞＋“个”＋数量構造 の型をもつ例が、宋代の語録にみられることを、呂叔湘1985は指摘している。そして、そのような“个”を接尾辞に近い性格をもつものと解釈する。[注2)]そして、以下の例を引いている：

遮个一场狼籍不是小事(景德传灯录19)

（こうしたごたごたしたことは決して些細な事柄でもないのだ）

蘇州語が中古漢語の影響を残すとすると、この指示代詞の後に置かれる“个”は、量詞の“个”を考える時、たいへん参考になる現象と言える。呂叔湘は、“这个”の“个”を考察して、現代漢語の“这一个”や“这块”の形式は、歴

史的には、数詞に接尾辞として付くようになった量詞“个”が“这个”の後の“个”に影響してなったこと、また一方“这个”が“这一块”に影響を与えてなった結果であることを指摘する。[注3)]

2　接尾辞“个”

上に掲げた禅家語録には、幾つかの品詞に付く接尾辞“箇（个）”が多くみられる。[注4)]

例：

数詞　一箇

指示代詞　此箇　这箇　那箇

形容詞　好箇

副詞　真箇　早箇

動詞　分明箇

《趙州禅師語録》上巻[注5)]には、“什麽”を賓語にとる動賓構造の中に、“箇”が多く現れる。

例：

悔箇什麽　いったい何がそんなに残念なのだ

你見箇什麽　君はいったい何を見る

商量箇什麽　いったい何を商量しようというのだ

你曾聞箇什麽来　あんたこれまでいったい何を聞いて来たか

“箇”をもたぬ例：

（見浴頭燒火問云、）作什么　何をしているのだ

説什麽事　なんの話をしているのだ

更覓什麽佛　そのうえどんな仏を求めようか

問什麽事　何をたずねるのです

不挂什麽　何をまとわぬのだ

これらを見ると、“箇”は量詞と考えられる。しかし、上に掲げたように、禅家語録には幾つかの品詞に等しく接尾辞“箇”が付くこと、疑問代詞に“箇”

が付くこと[注6)]、また訳出された“箇”の例文を考え合わせると、必ずしも量詞とするのが適当とも言えない。また、この場合、“箇”が呉語の指示代詞であるとするのも無理がある。

賓語に“箇”の付いた例：

者漢只認得箇死语　　この男はただ一つの死語を知っているだけのことだ

比来抛磚引玉、只得箇墅子　　このごろわしは瓦を投げ出して玉を手に入れようとしたが、ただ一個のまだ焼いてない煉瓦を得たわ

これらは動詞が“只”で限定されていることから、それぞれ“死語”“墅子”を強調している文と解釈することができる。

覓箇闡提人、难得　　一人の闡提（不成仏、凡夫）の人を求めても、得ることはむずかしい

《碧巌録》第二則[注7)]

道箇佛字、拖泥帶水。道箇禪字、满面慚惶

仏というても汚れ、禅というても面目まるつぶれだ

同様に以下の例も強調と考えられる。

《祖堂集》８巻[注8)]

僧問、學人自到和尚此间覓个出身處、不得、乞和尚指示个出身路、師云、闍梨曾行什麽路来

僧問う、私は老師のところに来ましてから出身の処（自由自在の境地）を求めてきましたが叶いませんでした。どうかその活路をお教え下さい。師云う、あなたはこれまでどんな活路をとってきたか

今、動賓構造の、動詞と賓語の間に置かれる“箇”を考えてみるに、それはあたかも量詞のように考えられるのだが、実際には動詞の接尾辞としか考えられないものである。《伝灯録》をはじめとする禅家語録には、数詞などに付く接

尾辞“箇”が多く見出せるのが、その語彙的特徴とされるが、数詞を伴なわず賓語に前置する“箇”はまだ見えないはずである。これは、上に見てきた、“這箇”の“箇”と数詞に付く接尾辞の“箇”の関係に類似していることがわかる。このことは、動詞＋“箇”と数詞＋“箇”という、二種類の“箇”が別々の語機能をもって存在したことを意味する。そして、その後の数詞に付く接尾辞“箇”の優勢により、動詞の後に付く接尾辞“箇”とが融合し、動賓構造の間に置かれる“箇”が量詞と考えられるようになった。

3 《岳飛》中の 動詞＋“个(格)”＋賓語

下の用例は、強調文ではあるが、量詞の優勢と多様化のために、もはや量詞としか見なされなくなった例である。

1）動詞が“是”

①万汝威上来,说元帅,我是投降哉,但是我勿想在宋朝为官,因为我自家晓得,是个勿用之徒, 放在营里呒不啥用场,让我回转家乡去吧!(上 434)

（万汝威が上がってきて、元帥に言います。私は投降した身です。ですが宋の役人にはなりません。自分が無用のであることがわかっておりますから、この陣に置いてもらいましても役には立ちません。いっそ故郷に返していただきたい。）

②俚实际是投机,是个反复无常个小人。(上 434)

（あの男はいずれの方にも付く男だ、いつも立場のくるくると変わる小物だ。）

③李刚年纪又是大, 又是个文官。(下 14)

（李剛は年もいっているし、文官でもある。）

④高宠想, 来格朋友是个好手。(下 20)

（今度の敵は手ごわい相手だと、高寵は思った。）

これらは判断動詞に付く例である。

2）動詞が“有”

①倷假使今后再要随便出营,格是呒不这样巧,一直有个张宪等好在那里救倷。(下

184)

（(康帝よ)、今後また勝手に陣を脱け出ようとされるならば、こんなふうに上手い具合にはまいりません。あの張憲が見張りをしてあなたにもしものことが起きないようお守りしていますから。)

②倘使俚今朝勿喊赵必方进去,高宠在华车阵死,格条西山套牛皋出勿出。有个赵必方在身边,还好保俚出来。(下 19)

（今日もしも趙必方を連れに入れなかったら、高寵が華車の陣で死んで後、この西山から牛皋は脱出できなかった。趙必方がそばにいたからこそ、脱出できたのである。)

③种师道立在车板上,手捧长枪,车子后头有个人,扯面旗,旗上一个“种”字。(下 241)

（種師道が長槍を手に車の上におります。戦車のうしろには人が乗っていて、“種”の字が書かれた旗を掲げております。)

④“白面孔在此地。”啊?陈应龙一呆。“你怎么知晓?”“倷看嘘,凉亭柱上有只马结在那里。”老老捋仔两根寿桃胡子,往过去一看,有只马在那里,人当然在那里。(下 85)

（「白塗り（岳雲）はここです」え？と陳応龍はあっけにとられております。「おまえ、どうしてそれがわかる？」「ご覧なせえ、涼亭の柱に馬がつながれておりますから。」年寄りは長寿ひげをなでながらそちらに行ってみますと、馬がおります。当然、人も居るわけです。)

①②は賓語が、既知の人名の例。これらでは、“有”の賓語である、その人を強調する。呂 1984 では、人名の前に置かれる量詞“个”に言及し、「～のような」という喩えや未知の人物に解釈する[注9]が、上に挙げた例には適さない。③は“一个人”の“一”の落ちた形式ということもできる。このように、ここに挙げた“个”は、数詞に付く接尾辞“个”の優勢により、今日では量詞と考えられている。④は、“个”以外の量詞で、“个”の機能が影響を与えたものである。このため、これも数量には関わりがなく、馬の強調を表わしている。

3）その他の動詞

①岳云到底是小囡，拉仔牛皋往头营去。碰着个牛皋勿响，叔侄两家头直到头营。（下 118）

（岳雲はなんと言ってもまだ幼ない子どもであります。牛皋の手をひいて（小児禁制の）第一陣に行きます。しかし、牛皋には何も言われないまま、結局この叔父と甥の二人はそのまま陣営につきました。）

②倷粗心点看，好象老虎两只前脚抱牢个白面孔，老虎嘴在啃白面孔格头。（下 85）

（聴衆の皆さまご覧なさい。これは、どうも虎が前足で白面孔［岳雲］を押さえつけ、その頭に噛みついているようであります。）

③元帅想，今朝双方交兵，金营么赠冲开，丧脱仔个高宠，皇帝面前哪亨交帐。（下 33）

（今日双方が交戦したが、金の陣営は突破することはできなかった。そのうえ、高寵まで失ってしまった。これでは皇帝にはどう説明したらいいのか、と元帥は考え込んでおります。）

④关铃听见娘派人去喊娘舅来，一吓，咳！俚就怕个娘舅。（下 83）

（関鈴は母がおじを呼びにやらせたと知って、びっくりです。実はあの叔父さんが大の苦手なのであります。）

⑤我以为打仔啥个大胜仗，原来下头在追个敌将。（下 12）

（わしは大勝利だと思っていたのに、なんだ、まだ麓で敵を追いかけているところではないか。）

⑥倷勿重用，只叫我做个副将，心里恨啊。（上 434）

（私を副将などにするだけで、重用もせず、本当に腹立たしいかぎりだ。）

⑦勿要打哉，另外选个黄道吉日再下山吧。（下 33）

（戦はもう止めにして、改めて黄道吉日の日に山を降りましょうぞ。）

①～③は、既知の人名、あだ名の特定の人を賓語に取る例である。④～⑥は特定される人物、或いは眼下に見て取れるもの、或いは満足できない役職を賓語としており、それぞれの文にあってはいずれも強調を表わす。⑦は呂1984[注10)]でも取り上げているが、特定される具体的な事物であり、“个”は付けないはず

のものだが、実際の口語ではよくみられる表現である。

4）動詞接尾辞“个（格)”

①头营上小鞑子一看，来格啥物事?浑身雪白象一只白猴。（下 265）

（第一陣営の金兵はそれを目にして、おや、あれは一体なんだ？と見るとそれは全身真っ白で、一匹の白猿のようであります。

②圣旨么我发出去格，我勿曾发旨召倷来，啥场化来个圣旨呢?（上 321）

（聖旨は天子である私が出すものだ。私はまだそれを出しておまえを呼んでもいないのに、いったいその聖旨は誰が出したのか？）

③岳飞觉得奇怪，就问大家，唔笃从哪里听得来格闲话?(上 237)

（岳飛は不思議に思い、おまえ達はその話をどこから聞いてきたのだと、皆に尋ねるます。）

④大约是木头做格，外头糊格锡纸头，雪白锃亮。（上 547）

（恐らくそれは木で作られており、外側に錫箔が貼ってあるので、白くピカピカと光っているのです。）

⑤楚霸王项羽这样狠，拨韩信围困在九里山前，就是摆格华车阵。（下 24）

（楚の覇王項羽はこんなに凄腕で、韓信に九里山で包囲されたましたが、その時敷いた布陣がまさにこの華車の陣なのです。）

上の文は、いずれも動詞とうしろの名詞が動賓構造をつくり、意味上の主語、賓語、状語を強調・説明する強調文である。各用例中、“个”“格”と表記が2つあるが、同音である。

①は疑問代詞が賓語の例である。①②は動賓構造ではあるが、存現文であり、意味上の主語が賓語の位置にある。このような“个”について、呂 1984 は“一”は常に省略され“个”だけが置かれると説明している。[注11)]このことから、①②の“个”は賓語に付く量詞ではなく、動詞の接尾辞と考えられる。

③～⑤はやはり強調文で、これらの動賓構造の間に置かれる“个”は北方語の“的”に相当する。このことから、“个”は、後の賓語に付く量詞ではなく、前の動詞に付く接尾辞と考えられる。

4　動詞接尾辞“个”と“是……的”文

前節３の４）③～⑤例文中の“个”が、北方語の“的”に相当し、それらの文は強調文であることを見てきたが、太田 1981 は、こうした“的（底の系統の）”は元、明、清に現れると指摘される。また、“是”の品詞変化に因って起きた、偏正構造をつくる“的”と説明されている。[注12)]

③～⑤の用例は、強調文である。そして、个”を介した、前の動詞とうしろの名詞の関係は、あきらかに動賓構造をつくる。また、上で見たように北方語の“是……的”に相当する強調文である。この“是……的”文は、動詞接尾辞“个”が量詞“个”の優勢に因って、接尾辞としてもはや認識されなくなった結果に生じた文の構造である。すなわち、動詞のうしろにくる“个”は量詞以外には認識されなくなったこと及び“是”の指示代詞から判断動詞への品詞変化が、この文構造の背景になっているものである。そのため、強調文を表す時、“底”の系統の“的”が“个”に取って代わり、動賓構造ではなく、偏正構造をつくることなったと考えられる。しかし、この文構造が、形式的には偏正構造をとるにも関わらず、実際には動賓構造をとるといった特異な文であることからも、これまで述べてきた動詞接尾辞“个”の名残をとどめるものということができる。

5　まとめ

（1）　蘇州語には指示代詞の接尾辞が継承されており、これを用いる時、強調を表わす。

（2）　同様に、動詞接尾辞も継承されており、北方語では“是……的”文がそれに相当する。

注１）　版本は人民文学出版本 1982 北京に依った。

注２）　《近代汉语指代词》吕叔湘 1985 学林出版　p198-p199
　この“个”が“这”［ tǐag ］、“那”［ nǐag ］の韻尾［ -g ］の名残りか、と推測している。

注３）　呂 1985　p 198

注４）　《中国語学新辞典》1969 光生館　景徳伝灯録の項 258 p、古賀英彦〈禅語録を読むための基本語彙初稿〉《禅学研究》第 64、1985 年

注５）　《禅家語録Ⅰ》秋月龍珉訳 1972 筑摩書房 p 395 - p 519 に拠った。

注６）　＜個字的应用范围，附论单位词前一字的脱落＞《汉语语法论文集》（增订本）
　吕叔湘 1984 年商务印书馆　疑問代詞に付く“箇（個）”については、単複に関わりない疑問代詞に付くのは、抽象名詞に付く例に類似していると、説明する。p 162

注７）　《禅家語録Ⅱ》苧坂光龍ほか訳 1974 筑摩書房 p167-p208 に拠った。

注８）　《祖堂集》静・筠二禅徳編著（禅学叢書４、柳田聖山主編 1984 年中文出版）p 158

注９）　呂1984, p162-p163

注10）　呂1984, p160

注11）　呂1984, p169-p170　存現文（“後置主語”）ではなく、意味上の主語が文頭に立つとき（“前置主語”）には、“一”は省略できないと言う。

注12）　《中国語歴史文法》太田辰夫1981朋友書店　p356-p357